5　いじめ兆候発見時の事例に学ぶ

【01－C2-005】**いじめの兆候発見時の取組事例（小学校）**

いじめ（言語的攻撃）に早期に対応することができた事例

キーワード：言語的攻撃　早期の報告・チームでの対応　いじめを許さない集団の文化の育成

言語的攻撃から問題をつかむ

Ａ子は、５年生の２学期から宿題を忘れることが多くなり、係の仕事をてきぱきとこなせない様子も見られるようになった。また、班の中でも厳しい口調で注意されたり、容姿についての悪口が聞かれるようになってきたと担任が感じていた。

本人からいじめについての訴えはなかったが、**気になった担任は**Ａ子が学級でどのような思いで生活しているかを**丁寧に聴いた**ところ、いじめられているという認識をもっていることがわかった。

・個人への言語的攻撃を見逃さない。これ以上進まないうちに組織的な対応で解決を図る。
・困っていることとともにその時の気持ちまで聴く。

いじめの報告とチーム支援の体制

担任は、Ａ子が**いじめられているという認識をもっている**ことを重く受け止め、学級内のことではあるが、早期解決のためには職員の協力が必要と判断し、学年長や生徒指導主事にいじめを受けている児童がいることを**すぐに報告**した。

生徒指導主事はいじめの事実を管理職に報告し、いじめられた児童といじめた児童に対しての**事実関係の調査を本日中に行う**ことを決めた。Ａ子の話しからいじめた側が複数いるため、学年団や担任外で手分けし個別に聴いた。その際、事実だけではなく、そのときの児童の気持ちも丁寧に聴くようにした。

個別の事情聴取でわかったことを持ち寄り、情報をつきあわせた。

・いじめの認知があるときはすぐに対応する。
・担任一人で解決しようとしない。
・組織でスピード感を持って対応する。

個別の聴取をする。事実と気持ちを分けて

＜いじめを受けた子の気持ち＞

Ａ子は、低学年の頃から友だち関係に苦手意識をもち、自分から集団に入っていくことに困難を感じてきた。今年に入り、同級生から強い言葉でけなされたり、容姿をからかわれることが徐々に増え、悔しさだけでなく恐怖感も感じていることがわかった。また、学習では特に算数について困難を強く感じており、宿題を全てすることが負担でたまらなかったと話してくれた。

・いじめを受けた子は、いじめられる自分が悪いと自分を責めているため、なかなか心を開けない場合があることを理解して対応する。
・本人の辛い思いを全て受け止めるように聴く。

＜いじめをした子の気持ち＞

Ａ子に時々嫌がらせをしたり、強い口調で言葉を浴びせたり、容姿をからかったりしたことを認めた。Ａ子の作業が自分たちと同じペースで進まなかったり、話しかけても返事が思うように返ってこなかったりしたので不満を募らせていた上、つきあいにくさを感じていた。またこの子たちは、Ａ子とのつきあいにくさを理解してもらえず、教師や学級に対する不満をもっていたこともわかった。

・いじめをした子が複数の場合は、個別に話を聴く。
・どうしてそのような行動をとったか、本人たちの困り感は何かも合わせて聴くようにする。

個々の児童・保護者への対応

本人の了解の上で保護者に伝える。いじめをした子へは、保護者に連絡しなければならないほど大変な事態であることを理解させる。いじめられた子との関係改善の見通しが持ててから保護者に伝えると、いじめをした子や保護者をより安心させられる。

＜いじめを受けた子への対応＞

担任は、A子の辛さを受け止め、**いじめから必ず守る**こと、**宿題については相談しよう**と話した。また、どのような解決方法を望むか聴いたところ、強い言葉で言わないでほしいこと、いじめた人に謝ってもらうとともに、二度といじめをしないように約束してほしいと言った。**本人の要望に添うような解決をしようと提案**し、同意してもらった。

★いじめを受けた子の保護者への対応

「本人がいやがることをされていて、心配なんです。」と担任と学年長が家庭訪問をして学校としてつかんだいじめの**事実を正確に伝えた。**そして保護者の思いや願いを聴くとともに、A子と確認した**当面の対応策を伝え**、学校が一丸となってお子さんを守ること、明日以降面談や連絡を密に行うこと、家庭での様子についても知らせて欲しいことなど**協力をお願いした**。

・教師は本人を絶対守るという姿勢を示し、相談しながら対応する事を確認。担任との信頼関係を強める。
・本人の気持ちに添った具体的な対応策を提案する。

＜いじめをした子への対応＞

子どもたちが自分の気持ちのままに発言していた言葉や行動は、A子にはとても辛いものであったことを知らせ、相手の身になって考え、行動することの大切さを話し、本人たちに**反省を促した**。また、A子が傷ついた事実に対して、どのようにお詫びをするか**一緒に考えた。**その結果、翌日朝の会の前にA子に一人ずつお詫びをすること、A子には静かに話しをすることを決めた。

★いじめた子の保護者への対応

「人のいやがることをやっていて、心配なんです。」と担任から電話を入れ、保護者に学校に集まってもらった。管理職、学年長、担任が対応し、A子に対して行っていた事実と、A子がそれをどのように受け止めていたかを伝え、今後の指導について提案し、理解、協力を得るようにした。

・教師は、間違った行為を認めたことを評価しながら、児童の困り感へ具体的な対応策を提案しこれからを一緒に考える姿勢で指導する。
・保護者には、学校の具体的な対応策を説明し、協力をお願いする。

学校体制として集団への指導・保護者への協力依頼

＜学級・学年への指導＞

学級では、A子が悲しい思いをしていることに気づいていたにもかかわらず、止めようとする子がいなかったことを学級経営上の課題と捉え、**どのようなことがいじめに当たるかを再度具体的に指導**しながら、自らの行動や考え方を振り返らせた。学年では、定期的に学年執行部会を行い、**いじめの撲滅を学級や学年の課題として継続的に考え、意識を高めるような取り組みをした。**

＜学校としての取り組み＞

生徒指導主事が中心となり、全学年でいじめについての**調査を実施**。**いじめを受けているという認識を持つ児童には、担任や、本人が話しやすい教員が丁寧に面談**を行い、解決に向けた取り組みを行った。その上で、いじめとはどういうことなのか全校で指導し、**いじめを許さないという姿勢を改めて示した**。

校報や学年通信などでもいじめへの対応について取り上げ、**保護者へも広く知らせて**いじめについての意識の高揚を図った。

・いじめアンケートを利用し、どのような行為がいじめになるのか理解させる。
・児童の組織活動を活かし、児童同士で意識を高め合えるようにする。

・学級、学年、学校としていじめを許さないという教師の姿勢を、児童や保護者にわかるように示しながら、「いじめを許さない集団づくり」をすすめる。

実践のポイント

・いじめについて担任や職員の理解が適切であり、チームで支援する体制がとられていたため、初期対応が素早くできたこと。
・教師が、いじめを受けた児童を絶対守るという姿勢を表明し、双方の児童や保護者の気持ちや願いを良く聞き、その時点でできる具体策を提案して進めたこと。
・いじめを許さないという集団の意識を高める活動を、個別の指導に続けて実施したこと。